

辞書ではよくわからない英語の語句と用法

——その2:「英語で『ウナギ文』は可能か?」——

藤 本 規 夫

1. 日本語の「ウナギ文」について

日本語は非論理的だとする通説に対して、日本語は「点的論理」性を持っていると反論した外山滋比古の本（『日本語の論理』中央公論社、1973）を読んだのは30年近くも前になる。西欧の言語は論理的だが、日本語は非論理的だとしていかにも日本文化そのものも劣っているかのようなコンプレックスを持っている多くの日本人に警鐘を鳴らした書物として印象に残っている。「日本語が論理的でないように考えられるのは、ヨーロッパ語の線的論理の尺度によって日本語をおしはかるからである。成熟した言語社会の点的論理を認めるならば日本語はそれなりの論理をもっていることがわかる」（同前掲書、P. 15）。しかし、今でも日本語が非論理的だとする意見は根強いらしいし、しばしばその例証としてあげられるのが「ウナギ文」¹⁾である。ウナギ文とは、「ぼくはウナギだ」という表現に代表されるものである。

外山は別の本で、違う例を用いて同じことを次のように述べている。

「『ボクはソバだ』『ボクはウドンだ』という言い方をおかしいという人がある。ボクがソバだったり、ウドンだったりするわけがない。そこから日本語は論理的でないというような議論をすすめることもないとは言えない。『ボクはソバだ』は『ボクはソバを注文する（たべる）』を省略したり、その不正確な言い方ではない。これで必要にして十分に正確である。ほかにだれもいないときに『ボクはソバだ』などと言ってはおかしい。『ソバ』だけでいい。『ボクは』は動詞の主格の役を果たしているのではなく、ほかの人と区別して、私についていうと、ほかの人はしらないが、私は…という限定をしている。『ボク（の注文）はソバだ』という意味である」（『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会、1992、P. 71-72）。

日本語のウナギ文が国語学者の間でいろいろ議論されていること、その説明に諸説があることを初めて知ったのは奥津敬一郎の『「ボクハウナギダ」の文法一ダとノー』（くろし出版、1993）を読んだときである。奥津は同書で、ウナギ文についての諸説を、Ⅰ述語代用説、Ⅱノダ説、Ⅲコピュラ説、Ⅳ分裂文説に分類しているが、自身は述語代用説に与みしている。例としては、「君ハ何ヲ食ベル?」というような質問に対しては、「ボクハウナギヲ食ベル」と言う代わりに「ボクハウナギダ」で済ませることができる。つまり、「ダ」が「食ベル」を代用している、と説明している（同前掲書、P. 203）。また、ウナギ文の解釈として、述語代用説の次に可能性のあるのは「分裂文説」だとしながらも、この説の問題点を例えば次のように指摘している。

「ボクハウナギヲタベル」→「ボク（ガタベルノ）ハウナギダ」→「ボクハウナギダ」の言い方の中で、2番目の文が分裂文と呼ばれ、（ガタベルノ）を省略した形が3番目のウナギ文ということになる。しかし、「…消去される部分はきわめてまとまりの悪い成分である。述語代用説ならば、述語というまとまった一成分を消去し、そこに『ダ』を付加するだけですむ」（同前掲書、P. 224）。

上に引用した外山の説は、ウナギ文は「ボク（の注文）はウナギだ」という意味だ、と読み替えることができるので、分裂文説と考えられる。

これらの述語代用説にも分裂文説にも反対の意見があるが²⁾、現在では述語代用形と考えるのが一般的のようである³⁾。

2. 英語の「ウナギ文」について

上で参照した奥津の本では、英語だけでなく、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、韓国語、中国語にもウナギ文があることを例をあげて説明している。英語の例はいろいろな人から提供された断片的なものだが、それらを抜き出してみると次の通りである（同前掲書、P. 247-252）。

- 1) I am the coffee. のように the を付けて言うことができるし、the なしでも可能。
- 2) I am a cheese hamburger. は、例えばハンバーガー店で、いろいろな種類のものをまとめて買ってから、それぞれが注文したものに分けるときなどに可能。
- 3) I'm the veal; he's the spaghetti. は、ウエイトレスが注文の品をテーブルに持ってきてから、誰が何を注文したか、を聞いたときの答えとして可能。
- 4) A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar?"
B: Right.
C: I'm the coffee with cream and sugar, Beetle.
A: Okey. (to D) Then you must be the cream and sugar with no coffee, sir.
D: I don't like your tone of voice.
これはアメリカの兵隊漫画で兵隊 A が注文されたコーヒーを上官 B, C, D に配っている場面。
- 5) Are you a chicken or a steak? は、機内食を配りながら乗客に聞く場合に可能。
- 6) What you want is Missing Persons. I'm Homicide.
これは「刑事コロンボ」の一節で、警察署へ来た人に刑事が「行方不明捜索課へ行って下さい。ここは殺人課です」という意味のことを言っている場面。

小島義郎は、I'm coffee. は「ぼくはコーヒーを飲む」という代わりの表現として可能であるが、ストレスは coffee にではなく、I に置かないといけない、しかも複数の人たちがそれぞれ注文する場合とか、ウエイトレスが注文品をテーブルに持って来てから客が自分の頼んだものをもらう場合にしか使えない、と述べている。（『日本語の意味 英語の意味』南雲堂、1998、P. 178-183）

鈴木寛次は、I am noodles. が「私は蕎麦を食べる」の意味で可能だとした上で、ストレスは noodles でなく I に置かないと、「私自身が蕎麦である」になってしまう、と小島と同じストレスの置き方を主張している。（『こんな英語ありますか？』平凡社、2000、P. 30-31）

高橋潔は、「これ（『ぼくはウナギだ』）に類した言い方が、西洋語の『代表』として『論理的な言語』とされるらしい英語にもある。」として、R. Quirk et al.: *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman, 1985) で取り上げられている以下の例を紹介している。

- 1) Are you cosmetics?

2) Are you 103?

1) は例えば、デパートの売り場で「ここは（おもちゃや装飾品でなくて）化粧品を扱っていますか」と店員に聞く場合に可能、としている。2) は、ホテルの部屋番号を聞く場合に、「あなたの部屋は（104号室ではなくて）103号室ですか」という意味で可能、としている。（『現代英語事情』ジャパンタイムズ、1992、P. 2）

なお、原著にはこの他に次の例が出ている⁴⁾。

Are you church or chapel?

これは「あなたは英国国教会（the Church of England）のメンバーですか。それとも、英国国教会以外の教会のメンバー（nonconformist）ですか」という意味である、との説明がある。また、1) の場合は、Are you selling cosmetics? の述語部分の selling が省略された形（a compressed form of the predication）であり、2) と 3) については、形容詞的用法と考えられる、と解説されている。

参考図書に挙げられているものはともかくとして、ウナギ文が英語でほんとうに使用されているかどうかを I am (the) coffee. を例にして英語のネイティブ・スピーカーに直接確かめたので、その結果を下記する。一つは知り合いに直接聞く方法であり、もう一つはインターネットのチャット・ルームやフォーラムを利用した。

1. イギリス人の英語教員：注文の際には言わないと思うが、ウエイトレスがテーブルに注文品を持ってきた時には言う。その場合は、I am coffee. も I am the coffee. も可能。
2. イギリス人の英語教員：注文の際にも、注文品をもらう際にも使わない。いずれも変な感じがする。
3. アメリカ人の言語学者：注文の際には言わないが、注文品を持ってきた時には言う。その場合は、I am the coffee. のように the が必要。
4. カナダ人：注文する際には言わないが、ウエイトレスが複数の注文品を持ってきて、誰が何を注文したか忘れていたような時に使う。その場合、I am coffee. のように、the はなくてもよい。
5. アメリカ人：注文する際にも、注文品をもらう際にも言う。前者の場合は、I'm [a person who wants] coffee. の、そして後者は、I'm [the person who ordered] the coffee. の省略形と考えることができる。
6. アメリカ人：注文する際にも、注文品をもらう際にも言わない。前者の場合は普通、Coffee, please. と言うだろうし、後者の場合は手を挙げて、Coffee. とだけ言う。
7. ドイツ人の英語学者：注文する際には言わないが、注文品をもらう時には言う。この場合、the が必要。ちなみに、ドイツ語でも、Ich bin der Kaffee. (I am the coffee.) とか、Ich bin das Bier. (I am the beer.) のように言う。

3. お わ り に

日本語のウナギ文は日本語の「非論理性」の証拠であるとか、「論理的」な言語である英語にはウナギ文に相当する文は存在しない、という言い方は間違いであることが判明した。ただ、筆者が集めた上記の例は対象が 7 人であり、即座にそれらの表現の存在を認めた人も混じってい

るが、一部のネイティブ・スピーカーはその存在を否定した。また、そういう表現も可能と答えた人でも、筆者が日本語の例を挙げたり、仮想状況を説明した上でないとピンとこなかった人もいた。ということは、日本語では誰も疑問を持たないウナギ文だが、英語の場合は使われることはあるが日本語ほど一般的でないこと、そして英語での用法は「注文の際」よりは「注文品をもらう際」の方が多い、と考えた方がよさそうである。小島は、日本語のウナギ文は決して非論理的な表現ではないこと、英語でも同様の表現が可能であるとした上で、「(英語の場合は)普通は使わないといってしまうほうが、少なくとも英語学習上はベターであると思う」⁵⁾と述べている。

注

- 1) 「ウナギ文」がどこからきたか、については奥津は次のように述べている。
「断っておくがうなぎ文の元祖は私ではない。うなぎ文事始めはおそらく金田一春彦(1955)で、彼がこの例文をあげ、しかも簡単ではあるが適切な解釈をしている。私はただそれをしつこく追い回して論文に書いたり、本にしただけである。」(『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版, 1993, P. 236) ちなみに、奥津は金田一の考えを述語代用説に分類している。(同, P. 213)
- 2) 安藤貞雄は『英語の論理・日本語の論理』(P. 148-149)で、述語代用説は「現在の文法理論では到底認められないものである」とし、分裂文説については、述語代用説よりは「直感に合うけれども、いくつかの問題点がある」と指摘、自身はウナギ文は「主語なし文に由来する」との説を展開している。
- 3) 小島義朗『日本語の意味 英語の意味』南雲堂, 1998, P. 181
- 4) R. Quirk *et al.* : *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London, 1985, P. 246
- 5) 小島義朗『日本語の意味 英語の意味』南雲堂, 1998, P. 183

参 考 文 献

- 安藤貞雄『英語の論理・日本語の論理』大修館書店, 1989
奥津敬一郎『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版, 1993
小島義朗『日本語の意味 英語の意味』南雲堂, 1998
鈴木寛次『こんな英語ありますか?』平凡社, 2000
高橋潔『現代英語事情』ジャパンタイムズ, 1992
外山滋比古『日本語の論理』中央公論社, 1973
外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会, 1992
R. Quirk *et al.* : *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London, 1985